

● 《「変わらないものに会いに」》(2011)

#### 伝えたいものから

彼がつくる作品には、自分の体験したこと、経験を込めたという作品が多い。「作品は自分自身みたいなもので、絵の中のストーリーは自分の体験や思ったことが元になっている。だから刺激のない生活をしてるとだめだね。とにかくいろんなことを体験しないとアイデアが出ない。」

たとえば青野さんの作品に水底に横たわるイルカを描いた《「変わらないものに会いに」》というものがある。これには青野さんが地元に戻った際、以前とは変わってしまった友人と再会し、少なからず衝撃を受けたという経験が根底にある。しかしその友人の本質は変わっていないことを確認したことにより、変わらない関係を認識したという経緯をもとに生まれた作品である。ただし、なぜモチーフにイルカが出てきたのかはわからないという。わからないが出てきたイルカをモチーフにストーリーは完成された。イルカは花言葉に「変わらない友情・永遠の友情」という意味を持つ花、ローダンセを手にした姿で描かれている。

#### 物語をアウトプットする

青野さんは頭の中で作品の形ができると下描きしつつどんな絵にするか固め、影の様子を見るために最初に油粘土で動物のかたちを作り、写真を撮る。頭の中だけだとうまく陰影がつけられないから、そうして影がどんな風に落ちているのか大まかにみるのだという。青野さんが動物を描くとき、基本的には資料を使わないそうだ。しかし、パステルに慣れてきたころ、描き込みをしようとした際にデフォルメの限界を感じ、資料を使うことも増えたい。ただしそういうときもあまり動物としてリアルすぎず、どこか人間味を感じさせるように努めているという。

そして下描きを本紙に写した後、いよいよパステルの使用と相成るが、まずこのときに作品全体をイメージする色の補色を画面全体に用いる。この補色から作業に入ること、色が濁る代わりに画面全体の色に深みを与える効果がある。このとき画面全体に補色を乗せ、紙をけば立たせることで、後に使うパステルをのせ易くする。その後、初めに使った補色の対となる色を画面にのせ、こす

ることでやっとパステルを画面にのせるための準備が整うこととなる。非常に地道で根気のいる作業であるが、最初に用いた色は後々雰囲気づくりに役立つ大事な要素となる。そして次に紙の上に暗色のパステルの層を作り、その上から明るい色のパステルをのせて作品を描き起こしていく。

#### パステルという画材

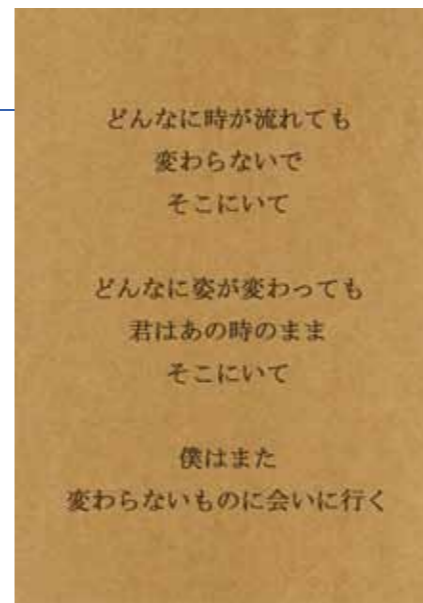
青野さんは2年の中途からパステルを使うようになったという。もともと描き直しがきかない一発描きの要素が強いものよりも、何度も線を重ねていくような作業を好んだ青野さんにとって、幾重にも描いたり消したりできる手法は合っていたようで、それから先の作品は色鮮やかなパステルを用いたものとなっていく。

パステルという画材は混ぜるほどに彩度が下がり、混ぜるほどに色は濁っていく。青野さんはパステルを使い始めたころは、まだ混色の度合いが少なく、素のパステルの色鮮やかさを生かした画面作りをしていた。しかし、パステルが混ぜれば混ぜるほどに濁るとわかった時、青野さんは色が濁るのを怖がったという。それを一度振り払うため、色を混ぜに混ぜて彩度を落とし、影を作る試みを行った。影を多く作り、全体のトーンを落とした作品で描かれる動物にはリアルさが生じた。一つ壁を突破した節目になったといえる。

#### 立ちふさがる壁と試行錯誤

そこから新しく表現を試行錯誤し、トーンを落とした作品にとりかかった結果できたのが「Light展」(2011年6月、アートギャラリーT+)である。深みを増した色彩をもちいて、深い闇の中浮かび上がるよう、表情豊かに動物たちが描かれたシリーズは、壁を越えた成果の集大成といえる。

この成長のきっかけには作家の牧野千穂さんとそのパステル画との出会いがある。牧野千穂さんはフリーのイラストレーターとして活動しており、プロとしての技量の差や、絵本や本の表紙の仕事をしていることに「や



● 《「変わらないものに会いに」》の手紙



● 《「僕にしかできないこと」》(2011)

られた!」と思った、と青野さんは語った。牧野さんの作品はパステルを使っただけの表現と鮮やかな色彩を特徴としており、そのモチーフには動物も多く含まれていた。青野さんは動物を好んで描く自分のスタイルが真似になってしまうという迷いから、別ジャンルを描こうかと考えたこともあった。しかし牧野さんと実際に話し、作品を見てもらう機会があり、そこで大きく刺激を受けた。そして彼女の作品を参考にし、自分の技量を高めるとい目標を持つに至った。「この人の描き方で自分が描いたらどうなるだろうって考えられるようになった。あとは真似してみようという試み。」落ち込みつつも前進する結果となった。

#### 伝えたい言葉

青野さんの作品は絵と言葉ありきという形で構成されている。それについて尋ねると「たまたまタイトルが無題って作品があるけど、それってどうなんだろうと個人的には思うん



● 《「やっと会えたね」》(2011)

だ。」と彼は語った。「タイトルには、かぎっこをつけるようにしてるんだけど、これはしゃべり口調だと思ってつけてる。絵の前に立った人にメッセージを投げかけるような、語りかけるようなつもりで。」絵とタイトルを対応させて作品のイメージを作っており、一枚絵とタイトルの要素を組み合わせることで、観る人それぞれが内面でストーリー化を行うことを意図しているのだという。「イメージを強制させることは難しいけど、いろんな解釈をしていい、というスタイルに今はおさまってるかな。」

#### それは想像の鍵となる

そして青野さんの作品には絵とタイトルのほか、メッセージという要素を加えられる。一枚の絵には対応する一つの詩篇があり、個展の際には絵と並んで展示されることもある。「メッセージが先にあってそれにイメージがつくことがあったり、逆にイメージからメッセージが湧いてきたり、順序が違って

絵のストーリーと対応したメッセージは浮かんでくる。」

絵と対応したメッセージがあることは、青野さんの作品の特徴である。それは「物語性を出すためでもあるし、単に自分が伝えたいことだったりもする」のだという。一枚の絵の中に込められる情報量には限りがある。絵本のような作品の形式であれば、観る者に自分の考えるストーリーを伝えるという意味で強い影響力を持つだろう。しかし青野さんは自分のストーリーを押し付けるのではなく、観る人が自分の中で作品をかみ砕いて、個人の内面でストーリーを作っていくという形を望んだ。その結果が現在の作品のかたちである。今青野さんはストーリーの入り口となるような作品のかたちを目指している。「自分の伝えたいことが伝わりつつ、想像の余地が残るような、ニュアンスを伝える一枚絵の展示ができればいい。」